

「留学生の第二の古里に」

大崎市が運営する本州初の公立日本語学校「おおさき日本語学校」の開校式が24日、旧吉川小を改修した校舎で開かれた。4月初旬にはベトナム、インドネシア、台湾から最初の留学生計28人を迎え入れ、同日に入学式を開く。

大崎・日本語学校開校式

市、県の関係者や地域住民ら約90人が出席。伊藤康志市長は「多文化共生の花を咲かせ、結実させる。大崎市が留学生の第二の古里となり、卒業後も一人でも多く住んでもらうこと。地域活力の一翼を担ってほしい」とあいさつ。村井嘉浩知事は「県としてやれることをしっかりとサポートしていく」と述べた。

同校は北海道東川町に次ぐ全国2例目、国が昨年施行した認定制度では初の公設公営校。日本語教育のほか、独自科目「Oタイム」を通じて地域との交流を図る。初年度は3課程（1年、



①開校式で校名板を手を持つ鈴木俊光校長（右）と伊藤市長
②テープカットで学生寮の開所を祝う関係者

多文化共生へ関係者決意

1年6カ月、2年、計60人の入学を想定し、現在は10月に入学する残り32人を募集中。5年後には100人を目標とする。開校式に先立ち、民間事業者が市有地を無償で借り受け、JR吉川駅に近い同市吉川中里に整備した学生寮「Oneness Court（ワンネスコート）和・楽・持」の開所式もあり、約70人が出席した。今回は1棟目として60人分の居室を整備。留学生の増加に対応して40人分の2棟目を建設する。事業者の早坂竜太氏（吉川土地社長）は「地域への恩返し、子どもたちや留学生への恩送りとして、しっかりと運営する」と誓った。

学生寮も開所



大崎市立おおさき日本語学校学生寮開所式

宮城・大崎市が日本語学校開校式典

宮城県大崎市が外国人留学生向けに設置する「大崎市立おおさき日本語学校」が24日、開校式典を開いた。伊藤康志市長は「2年半を費やして準備を進めてきた。多文化共生社会の実現に向けて、異文化交流の拠点となる日本語学校と学生寮が果たす役割は大きい」と述べた。日本語学校は4月に開校予定で、初年度は台湾やベトナム、インドネシアから28人が入学する。

式典に先立って公開された学生寮は、2階建て延べ床面積は約1600平方メートル。約60の居室とリビング、キッチンなどがある。

廃校を公立の日本語学校に

さらに一歩進んだ試みも出てきた。公立の日本語学校を設立し、地方創生の柱のひとつにしようという取り組みだ。

宮城県の北西部に位置



する大崎市。人口減少が進む約12万人の街に4月、「市立おおさき日本語学校」が開校する。国内で2番目の公設公営の日本語学校となる。校舎は、廃校になった小学校を県の支援金や国の交付金を使って改修し

「おおさき日本語学校」の図書室には漫画も並ぶ。鈴木俊光校長は「地域に愛される学校に」と言う。11月10日、宮城県大崎市、織田一撮影

た。生徒は18歳以上の外国人が対象で、教育課程は1年、1年6カ月、2年の3コースある。入学時の校納金は88万〜170万円で、市が半額程度を補助し、補助金の8割は国の特別交付税だ。

最初の入学生は約30人を予定。「卒業生の地元の定着」を前面に掲げ、地域との密着を重視する。商工会議所などと連携し、在学中のアルバイト

先や卒業後の就職先として校の生徒をさらに増やして地元企業の紹介を予定して鉄道の維持にもつなげる。カリキュラムにはたい考えて、学校の時間

小中学校の訪問といった校外活動も組み込んだ。えてつくった。「企業の人手不足対策 茂和泉室長は「少子化というだけではない。大対策はなかなか結果が出

「企業の人手不足対策 茂和泉室長は「少子化というだけではない。大対策はなかなか結果が出ない」と、市日本語学校推進室の茂和泉浩昭なげたい」と語った。

(永井啓子、織田一)

「多文化共生」実現へ

市立おおさき日本語学校開校

大崎市は24日、認定日本語教育機関「市立おおさき日本語学校」の開校式を現地(旧西古川小)同市古川保柳)で開いた。4月初旬からベトナム、インドネシア、台湾の留学生計28人を迎え入れ、同日には入学式も行う。

学生寮の開所式も



開校式で校名板を披露する伊藤市長と鈴木俊光校長

公設公営としては北海道東川町に次ぐ2例目で、国の新制度(昨年4月施行)下では全国初めて。三つの教育課程(2年、1年6カ月、1年)があり、初年度定員60人。残る32人も10月入学で募集して満たす構え。3年目に90人、5年目に100人が目標という。

が共に生きる「多文化共生」社会の実現、廃校活用モデル化を目指す。さらにはJR古川駅近くに学生寮を置き、陸羽東線での通学(古川-西古川間)を前提とすることで鉄路活性化の狙いも。県との「二人三脚」ぶりも目立つ。開校までの事業費約3億2000万円の大半が県補助金で、継続的財政支援も約束。留学生集めも県の現地サポートセンターが担っている。式には市と県の関係者、地域住民ら約90人

が出席。あいさつで、伊藤康志市長は『新しき和の創造』が学校の理念。留学生が大崎市に愛情を持ち、卒業後も第二の古里として地域活力の一翼を担ってもらえることを願う」と語り、村井嘉浩知事は「地域の皆さんも留学生を住民として受け入れてほしい。県もしっかりサポートする」と祝辞を述べた。同日は開校式に先立ち、民間活力導入による学生寮「Oneness Court 和・楽・持(ワンネスコートわらしじ)」(同市古川中里)の開所式もあつた。個人で建設費を負担し、維持管理も担う

市との「二人三脚」を強調する村井知事

学生寮開所をテープカットで祝う関係者



早坂竜太さん(古川土地社長)は「地元大崎市と宮城県への恩返し」と、次の時代を担う子どもたちや留学生への

3月末完成見込み。

恩送りへの力を込めた。寮は60人分の居室を備える1期棟が今回開所。2期棟は2026年6月下旬着工、27年